

# 探検する眼差しの持続と変容

鈴木 平

This paper focuses on James Cook and David Livingstone, and analyzes the literary works of these two navigation officers and explorers. Through the descriptive contents of these literary works, the similarities and differences in the consciousness of them are clarified. Both Livingstone and Cook were the professional explorers and exploration writers, and their social contributions remained influential in the subsequent centuries. Livingstone had, however, showed a clearer sympathy and a sense of the responsibility than Cook toward the residents of the region he visited. It is discussed that how the explorations, the thoughts and activities remained or changed in two centuries by considering their discourse.

## 1章 はじめに

### 1章1節 リヴィングストン研究の傾向と課題

本論は、19世紀のブリテンを代表するアフリカ探検家、宣教師のデイヴィッド・リヴィングストン (David Livingstone, 1813-1873年) の探検に対する眼差しを、彼の探検記をもとに社会思想史的に考察する試みである。

リヴィングストン研究は、英語圏を中心に主として伝記の側面から行われてきた。近年では、彼を取り巻いていた環境や思想、時代背景とともに彼を捉え、評価する研究も重視されている。例えば、リヴィングストン特別展のために編集、出版された *David Livingstone and the Victorian Encounter with Africa* では、彼とスコットランドやブリテン、アフリカとの関わりが、帝国の文化や社会史、経済史、思想史的な側面から考察され

ている。あるいは、*David Livingstone : Mission and Empire* で著者アンドリュー・ロスが意図したことは、リヴィングストンは、科学者、探検家、献身的な宣教師、ブリテン人の勇気の究極的な模範、奴隷貿易反対運動の宣伝者、そして、ヨーロッパの勢力によってヨーロッパ人の利益のために行われたアフリカ分割への道を切り開いた人物という、多様な立場を象徴する人物であり、それぞれの立場に属する人たちの動機を正当化するために、彼が利用されてきたことを明らかにすることであった (Ross, xi.)。

リヴィングストン研究は、帝国研究との関わりにおいて注目されており、様々な顔を持つ彼の像が明るみにされてきたといえる。しかし、大半のリヴィングストン研究書の時代背景は19世紀であり、また、ロスが指摘するように、それらは主に彼の活動記録として執筆されており、彼が生涯に渡ってとり続けた

\*この論文は、名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程の修了に際して、研究成果の一部をまとめたものである。(編集委員会)

立場や彼自身の言葉についての研究が疎かにされていると思われる (Ross, pp. 241-242.)。今後試みられるリヴィングストン研究では、彼のアフリカ探検旅行が、19 世紀と後の時代におけるブリテンの人々の帝国意識やアフリカ政策に及ぼした影響を考察することに加え、前世紀の探検家から彼が受け継いだ社会的役割や彼自身の活動目的について解明することをも、合わせて取り組まれなければならないだろう。

本論ではとくに後者の課題を追求するために、1857 年に出版され、リヴィングストンがブリテンの人々の思想や政策に与えた影響の大きな要因となった、彼の主著である探検記、*Missionary Travels and Researches in South Africa* (以下、*Missionary Travels* と略記する) に着目し、そこで示された彼の言説の内容を、18 世紀と 19 世紀の探検家の眼差しから捉え、検証したい。

#### 1 章 2 節 探検記による、継承と断絶の検討

リヴィングストンは、1853 年から約 4 年間をかけて、ヨーロッパ人として初めて全踏破距離 8000 キロのアフリカ大陸横断に成功した。帰還後、後援者であった王立地理学協会会長やロンドン宣教協会の理事に薦められ、*Missionary Travels* を執筆する決意をした。この本は出版後数ヶ月の間に 7 万部印刷され (Brantlinger, p. 86.)、彼は国民的英雄となった。

探検家たちによって書かれた多くの探検記は、19 世紀以前よりブリテンの人々にとって馴染み深い読み物のジャンルだった。読者が未だ詳細な情報を知り得ていなかったアフリカ大陸をテーマとしていたことが、*Missionary Travels* が関心を集めた一番の理由と思

われる。しかし、大作を書いたことなど一度もなく、自らの文筆家としての経験と才能を疑問視していた (Livingstone, D., 2001, p. 12.) リヴィングストンによって書かれた探検記が、それほどまでに人気を博したのは何故だろうか。

本論で扱われる探検記は、広く旅行記に含まれるものである。中世から現代にかけて主としてブリテンで執筆された旅行記の内容を検証したバーバラ・コートは、旅行記はある特定の意図を持って書かれたものであり、その内容の多様さには、旅の方法や旅が行われた環境そして文化的背景の歴史が反映されていると考えている。そして、旅行記研究は文化史の側面からのみならず、広く学際的な視野から行われなければならないと述べている (Korte, p. 3.)。

コートが指摘しているような、旅行記の持つ社会的意味の考察は、本論の一視点でもある探検記と帝国の関わりを研究する際の中心テーマの一つとされてきた。これらの研究では一般に、大英帝国が交易と領土拡張のために世界へ邁進した時代である 18 世紀から 19 世紀にかけて出版された探検記は、未知なる世界の情報を提供し、帝国の形成を支える役割を果たしたと理解されている。ティム・ヤングズは、アフリカに赴いた探検家たちの探検記に焦点を当て、探検記の中に垣間見られる帝国意識を分析した。ヤングズによれば、探検記はとくに 19 世紀のブリテンではノンフィクションの主要なジャンルの一つであり、帝国の政策の問題について議論したり、帝国主義を普及させるための格好の論壇でもあった (Youngs, ix.)。

一方近年日本で発表された啓蒙研究でも、ヨーロッパの啓蒙思想を理解する上で探検記

研究が重要であると考えられている。このような研究では、啓蒙期の探検記と対比する形で、19世紀の探検とその記述が言及されている。例えばドニーズ・プライミ＝シャピュイは、19世紀に行われた探検と比較し、18世紀の航海や探検は、利害を離れた純粋な知的関心によるものであったと考えている（プライミ＝シャピュイ、116-117頁）。またフェリペ・フェルナンデス＝アルメストは、探検の動機は、18世紀までは読者の科学的・商業的要求に応えるためのものであったが、19世紀に内容が変容し、それが帝国主義的の野望に取って代わられたと述べている（フェルナンデス＝アルメスト、162頁）。あるいは中川久定は、ルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィルの『世界周航記』は、哲学的航海者の旅行記であり、ブーガンヴィルが探検を行い航海記を執筆した18世紀後半は、暴力的植民地主義による侵略航海が行われた前後二つの時代の間には挿まれた、荒々しい暴力の行使から免れた平穏な一時期だったと見ている（ブーガンヴィル、430、433頁）。中川によれば、『世界周航記』に代表される18世紀の探検記では、ヨーロッパの人文主義的伝統と科学精神とが結合していた。しかし、19世紀にはこの二つは断ち切れ、探検記は純科学的記録の性格を帯びるようになった（ブーガンヴィル、433-434頁）。そして異民族や異社会はヨーロッパ人の眼差しのもとに見られるだけの対象となっていき、客観的観察者の冷静さが、19世紀の帝国主義支配へと繋がっていった（プライミ＝シャピュイ、90頁）。

しかし果たして、帝国研究者による19世紀の探検の解釈や、2世紀の探検の関係についての啓蒙研究者たちの見解が示唆するように、後世の探検家たちは、前世紀の探検家た

ちとは異なった意識で探検に臨んだのだろうか。二つの世紀の探検には啓蒙から帝国へという思想上の転換があり、それが牧歌的で平和的な18世紀から侵略と支配に彩られた19世紀へという文脈で、探検記に表現されたのだろうか。こうした疑問を検討することは、啓蒙と帝国形成との関係を思想史的に考える上で、一つの重要な視点を提供するだろうが、両世紀の代表的な探検記について十分な分析が行われているとはいえない。

本論においては、上記の問いを解明するための一つの事例研究として、*Missionary Travels*の言説の考察を、ジョン・コート・ビーグルホルの校訂による、18世紀のブリテンの航海士ジェームズ・クックの航海記 *The Journals of Captain James Cook in his Voyages of Discovery*（以下、*Voyages*と略記する）の言説と比較検討することを通じて行う。100年の隔たりがあるリヴィングストンとクックの比較は一見唐突な試みのように思われるかも知れない。しかし二人はそれぞれその世紀を代表するブリテンの探検家であり、大英帝国が形成されていく過程で作り上げられていった探検家という社会的機能を引き受けた個人という点でつながりを持っている。

クックからリヴィングストンへ何が継承されたかということは、彼らと王立地理学協会、ロンドン宣教協会という二つの団体との関わり合いを見ると明らかになるだろう。リヴィングストンを激励した王立地理学協会会長ロードリック・マーチソンの前任者はジョセフ・バンクスという人物だが、彼は1768年にクックの第一次航海に同行した博物学者である。バンクスは協会の活動を通じて、クックが航海で行った科学的な観察調査活動を継続

し、その活動内容を発展させた。マーチソンは、バンクス以上に世界の地理学的情報の収集に力を注ぎ、リヴィングストンの探検を含む、当時のブリテンの探検家が世界各地で行った探検旅行の多くを支援した。

リヴィングストンはロンドン宣教協会の宣教師としてアフリカへ渡ったが、この協会の活動にもまた、クックの航海が影響を与えたと考えられる。クックによる太平洋探検は、ブリテンの一般の人々が抱いていた異社会とそこに住む民族に対するイメージに大きなインパクトを与えた (Hiney, p. 8)。クックが伝えた異民族の記録により異教徒改宗への関心が高められたブリテンの人々は (Martin, p. 285)、未開の民族は不道德な存在かも知れないが、救済する価値があると考えようになった (Marshall and Williams, p. 293)。ロンドン宣教協会は異教徒たちの住む諸地域に宣教師を派遣するために 1795 年に設立され (Fletcher, pp. 222-223)、設立後間もなく協会は、クックが航海を行った南太平洋地域、加えて中央アフリカやその他の諸地域に宣教師を派遣している (Hiney, p. 111)。

以上のように二つの協会とクックとリヴィングストンとの関わり合いを見ると、18 世紀にクックの航海によって一層その要請が高まった探検と宣教という二つの事業を担う社会的役割が、19 世紀にリヴィングストンへと受け継がれていることがわかる。彼らが担った機能は著書の内容にも反映されたのである。

*Missionary Travels* を手がかりに、リヴィングストンに内在して見てみると、19 世紀の探検記に対する解釈に疑問が寄せられなければならないことが明らかとなってくる。そのためあらためて、18 世紀から 19 世紀にかけての探検記文学の変容という定説を検討

し、それにより主著から浮かび上がる新しいリヴィングストン像を示すことが、本論の主たる課題である。

## 2 章 18 世紀の探検記 —クックを中心として—

コートは 18 世紀の探検記の特徴として、科学的旅行記としての側面、帝国の書物としての側面、啓発の書物としての側面、そして読み物としての側面を指摘している。本章ではコートの解釈をもとに、18 世紀の探検記の特徴をこれら四つの側面から概観し、その諸特徴をクックの航海記 *Voyages* で例証する。

### 2 章 1 節 科学的旅行記としての側面

18 世紀のブリテンでは、認識の根拠を経験に求める経験主義を重視する姿勢が支持され、それは科学的知識を得るために行われた 18 世紀の航海や探検のスタイルにも影響を与えた。フランシス・ベーコンは『学問の進歩』の中で、経験主義に基づく自らの科学解釈と結び付けて、探検航海が知識と技術の発達に寄与すると断言している。

「航海と発見の進歩は、将来のあらゆる科学技術のさらなる進歩と増大に対する期待をもたらしてくれるだろう。何故なら、航海と発見は、神によって同時代に生まれるよう、即ち同じ時代に出会うよう運命付けられているからだ。」 (Bacon, p. 71)

この言葉に従うかのように、科学的旅行は 17 世紀にはすでに有力な後援基盤を備えていた。ロイヤル・ソサエティは、会報創刊時の 1665 年の 6 月に、ポイルの意を汲んで編集された、「哲学的業務に携わる旅行者への指導のカタログ」を出版している (Korte, p. 36)。

こうしてロイヤル・ソサエティや海軍省やブリテンの様々な協会が、旅の手段と観察方法を指導しながら、科学的探検旅行を支援するようになった。ブーガンヴィル、ゲオルク・フォルスター、アレクサンダー・フォン・フンボルト、クックなど、18世紀を代表する探検家たちの旅行には冒険旅行の要素もあったが、彼らに望まれたのは、探検旅行によって科学に貢献することであった(Korte, p. 37)。彼らは国家や様々な協会から、地理学や天文学、気象学、植物学、人類学などでの観察の方法について、細心の指導を受けて探検へ出発した。その上彼らの旅には、様々な装備、博物学者や科学者、動植物を採取捕獲する責務を与えられた助手、地図や視覚的記録を残すための画家たちが同行し、これらの人々の活動記録は、航海と探検の報告書を作成する上で重要な要素となった。

探検家たちは、現地で対面した様々な事象を綿密に科学的に観察し、その情報を詳細に記録している。例えば、クックは1770年にニュー・ホランドを訪れた時、次のような当地の海洋生物の子細な観察記録を残している。

「海には一般に様々な種類の魚がたくさんいる。その中でも、サメ、ツノザメ、カサゴ、ボラ、タイ、アジ、サバ、ヒトデ、アカエイなどは、それぞれ優れた種類のものだった。貝は3、4種類のカキ、即ちイワガキ、マンガロブに育つ小さ目のカキ、アコヤガイ、観察した中で一番状態が良く、かつ一番大きかった泥の中に棲息するカキがいた。また数種類のザルガイやハマグリもいたが、岩礁で発見されるそれらの多くは途方もなく大きい。ザリガニ、カニ、ムラサキガイ、及び他の種類の様々な貝もいる。」(Cook, vol. I, pp.

394-395. クック, 上巻 419 頁)

科学的観察に力点を置き、探検記の読者に情報を写實的に提示するという探検家の姿勢は、18世紀に行われた探検とその記録に共通する特徴である。

## 2章2節 帝国の書物としての側面

このような探検記の客観的、科学的性格とは一見対立するようだが、ブリテンが世界へ躍進し、大英帝国として確固たる地位を築き始めた18世紀以降に行われた探検とその記録は、必然的に帝国と深い関わりを持つものとなった。しかもそれは、実は科学的観察と深く結びついていた。

国家事業としての探検の姿は、クックの航海に典型的に示されている。クックはブリテンの海軍士官であり、彼の率いた船は単なる調査船ではなく、銃や砲弾を装備し、海兵隊を乗り込ませた軍艦でもあった。クックに託された任務は、航海記の冒頭に掲げられている「グレート・ブリテン大提監閣下の職務執行のための委員会委員による極秘の訓令」によく表されている。クックの第一次航海の主たる目的は、少なくとも表向きには、タヒティ島における金星の太陽面通過の観測だった(Cook, vol. I, cclxxix, クック, 上3頁)。しかし出発に際してクックが受け取った追加訓令は、航海の別の目的がブリテン国家の権威の増大にあったことを示している。

「従来知られていなかった国土を発見すること、かつ発見されたにも拘わらず完全には調査されていなかった遠隔の地についての知識を深めることは、海上勢力としての我国の名誉を多いに高め、グレート・ブリテンの王室の威厳を増し、通商と航海の進歩に資することが大であろう。」(Cook, vol. I, cclxxxii,

クック, 上巻 7 頁)

クックの航海が国家事業である以上, そこで収集された情報は国家機密として扱われ, さしあたり国家によって独占されるものだった。クックは航海を終えて帰国する度に, 航海中に作成した文章を全て, 部下の士官や下士官のものも含めて, 直ちに海軍省に提出することを義務付けられていた (Cook, vol. I, cclxxxiii-cclxxxiv, vol. II, clxix-clxx, クック, 上巻 9 頁・下巻 6 頁)。

さらに訓令では, 地図や民族誌的な記述を残すだけでなく, 新たに発見した土地について, 「原住民の同意のもとに」その領有を「グレート・ブリテン王の名において宣言」することが求められている (Cook, vol. I, cclxxxiii, vol. II, clxviii-clxix, クック, 上巻 8 頁・下巻 5 頁)。この任務は, 「原住民の同意のもとに」という部分は別にして, 忠実に実行されたようだ。領有宣言以上に注目されることは, クックが行った数々の命名行為だろう。領土と見なした地域に現地名の有無に拘わらず命名する行為は, 国の境界線を引くことのように, ある文化が他の文化を従属させるプロセスの中で最初に行われる行為である (Spurr, p. 4)。精密な地図の作成と同じく, 土地とそこに住む人々に関する正確な記述は領有または支配の前提であった。18 世紀に生み出された探検記の内容には, ブリテンの商業活動の世界規模における拡大と帝国の拡張が反映されている (Leask, p. 15)。

## 2 章 3 節 個人的見解と啓発の書物としての側面

科学的観察記録が探検記の主要な内容であったが, 旅人個人の意見もその記述に示されていることを看過してはならない。クック

の第二回周航に同伴したドイツの探検家フォルスターは, *A Voyage Round the World* (Foster, 1962) のまえがきで, およそ全ての旅行記には必然的に, 旅人個人の感受性と思考様式に基づく見解が含まれていると述べた。そして旅人が時代の子である以上, そこには彼らの時代の思想が反映していた。また探検記は異世界の新しい知見をもたらすことで, 同時代の人々の見方に修正を迫ることもあった。

人間を知ることに深い関心を抱き, 人間を知るためには, 人間とその社会の多様性を知ることが不可欠だと考えていた啓蒙時代のヨーロッパの知識人たちにとって, 探検記を読むことは, 外部への関心を満たす最も手取り早い手段であった (阪上, 227 頁)。自らや自らの社会をかつてないほど広い時空の中で捉えるようになった人々は, 新世界を語る旅行記を通して, 自分たちの在り方や判断基準をあらためて見つめ直すこととなった。探検は, 18 世紀後半のヨーロッパ哲学思想の主要な特徴をなす, ヨーロッパ的文化や意識の再認識や自己反省を促すこととなった。

クックの記述にも, 啓蒙時代の人間観が示されている。彼は, ヨーロッパ的な基準に従えば奇妙に思ってしまうような現地の習慣や住民の様子を淡々と, 時には嫌悪の意を表しながら語った。1769 年にタヒティ島を訪れたクックは島民を観察し,

「若い女性たちはこの上なく猥褻な歌を歌い, 淫らな身振りをしながら性交するという, 見るに耐えない踊りをする……上流に属する住民の内半分以上が結果などお構いなしに自由に恋愛を楽しむ……彼らは自由に接触し合い同棲し, 不幸にも生まれてくる子供はすぐさま抹殺される。……現地の人々の習慣はあ

まりに非人道的で、人間性の第一原理に反した習慣に基づいているため、ほとんど信じてもらいたくないとすら思う。」と述べている (Cook, vol. I, pp. 127-128, クック, 上巻 132-133 頁)。

素朴な未開社会賛美を否定する一方で、クックは現地住民がクック一行の乗組員を相手に土地の女性たちに売春をさせていること、訪れたヨーロッパ人が現地住民に性病を移していることなどを例に挙げながら、ヨーロッパ人の到来による現地社会への悪影響を批判する。

「ヨーロッパ人との交易の果てがこの始末だ。文明化されたキリスト教徒にとって面目なのは、もともと悪徳に染まりやすかった彼らの道徳を益々墮落させ、欲望というものを教え、その上恐らく病気まで伝えてしまったことだろう。彼らはこんなものをついぞ知らなかったし、先祖代々享受してきたこの幸福な平和を掻き乱す以外、何になるのだろうか。」(Cook, vol. II, p. 175, マーシャル・ウィリアムズ, 423 頁)

クックは、ヨーロッパ人の出現によって現地の人々が被りつつある肉体と道徳面での被害を自覚していたのだろう。クックのそうした思いは、進んだ文明は技術的發展を意味するに過ぎず、必ずしも人々に幸福をもたらすとは限らないという、自己の文明を相対化する考え方へと通じている。

しかしここで、クックの航海には他に大きな特徴が二つあることを確認しておきたい。それは第一に、クックの現地住民に対する火器使用の頻度の多さである。航海記の中には、発砲と殺傷を正当防衛の行使として住民に、そして航海記の読者に認めさせようとしているかのように記述されている箇所が見受けら

れるが、正当防衛の権利はむしろ現地住民の側にあったと思われる場面もある (Cook, vol. I, pp. 170-171, vol. II, p. 201)。第二にクックには、現地住民を根本的に劣っている者と見なすような態度があった。ポリネシアから連れて帰った現地住民のオマイが応用力に欠けており、向上心もないと述べているクックの日誌がその好例だろう (Cook, vol. III, p. 241)。

クックの探検と探検記の特徴を眺めることで、彼の航海を次のように総括出来る。クックは、国家事業として未知なる世界を科学的に調査するため航海へ出発した。彼は現地を観察、調査の対象として見ており、住民に共感したり、自分たちの同朋として彼らに親身に接することを積極的に試みなかった。そのため、住民に理解を示す時もあるれば、彼らに向かって発砲する時もあった。クックにとって現地や現地住民は、ブリテンの社会や人々とは異なる他者であった。18世紀半ばのブリテンには、未開社会賛美論の他に、南海の島々は吹聴されているほど完全無欠なのかという疑いと、ヨーロッパ人の到来が現地にどのような影響を与えるのかという懸念がほぼ共存していたが (Marshall・Williams, p. 284)、クックの航海記は、異社会に対するこれらの相反する見解を背景として書かれたものであった。クックの航海記が示しているように、18世紀において探検記は、異民族、異世界を自己の他者として捉えることによって、既存世界の価値観の再検討を促すような相対化の思考の方法を提示した。そのことにより、探検記は読者自身の文化を映し出す鏡としての役割を果たした (Leask, p. 15)。

なお近年の日本の啓蒙研究では、18世紀の探検記の内容は、未開社会賛美論から、プー

ガンヴィルが航海記で示したような異社会とヨーロッパ双方を批判し賛美もする折衷的な言説へと移行し、さらに、*Voyages* が例示するように科学的観察調査の記録書としての性格が強められたが、ラ・ベルーズが語ったように異民族を野蛮人として扱う言説も明示するようになったと考えられている。そして、18 世紀の探検記の内容は変遷を辿ったが、異社会と異民族を他者として見る姿勢は一貫して示されていたと理解されている。

#### 2 章 4 節 読み物としての側面

また探検記には、読み物としての面白さを追求するという記述スタイルが不可欠であることも忘れてはならない。読者に関心を抱かせる内容であることを期待された探検記の著者は、諸外国の様子や旅での風変わりな経験について、視覚的な表現を交えながら、意図的に読者の関心を満足させるように語った (Korte, p. 7)。例えばクックは、1770 年ニュー・ホランドを訪れた際、現地の女性が衣服をまもっていない様について楽しげに語っている。

「男も女も着物を着ないで歩きまわる。女性すらも彼らの恥部を全く隠そうとはしない。一人の紳士を除いては、我々の内で女性たちに近寄った者は誰もいなかったが、我々は彼女らの間に生活したがごとく、これに誠に満足を感じた。……我々は望遠鏡を通じて彼女らを見る機会がしばしばあったわけである。」(Cook, vol. I, p. 395, クック, 上巻 419-420 頁)

クックの航海記には、科学的観測記録に加え、とくに性的描写に関する表現が淡々とかつ頻繁に記述されているが、それは読み物としての航海記の価値を下げるものではなかつ

た。物語としての面白さを高めるストーリー性のある文章、誇張された表現、視覚的描写などの記述の特徴は、18 世紀の探検記に共通して見受けられる。

### 3 章 19 世紀の探検記

#### —リヴィングストンを中心として—

19 世紀を迎えたブリテンでは航海と遠征の技術が進歩し、より遠方にある未知なる世界への探検熱が高まった。コートは、19 世紀の探検記には、自然や人類学に関する長い説明、多方面に渡る科学的付録資料や図像が含まれており、この点で 19 世紀以前の旅行記や科学的探検の伝統が継承されていると考えている (Korte, p. 90)。しかしコートは、19 世紀の探検記独自に見られる特徴として次の二点を強調している。一つは、18 世紀の探検記で示された以上に、臨場感溢れる写実的な描写が連続する、パノラマ式の記述スタイルであり (Korte, pp. 85-86)、もう一つは、大英帝国全体をコントロールするための、基本的な手段となりうる知識を提供する書物という性格だ (Korte, p. 89)。そのうえコートによれば、第一の記述スタイルは、探検家が現地を訪れて目にしたものを、読者にありありと感じさせるためだけに用いられたのではなかった。それは、探検地を美化して描写することによって、読者に対し間接的に帝国主義的な進出を呼びかける技法でもあった (Korte, pp. 92-93)。このようにコートは、19 世紀の探検記では 18 世紀の探検記に見受けられる諸特徴の内、帝国の書物としての様相がより一層強められたと考えている。



### 3章1節 18世紀の探検記との連続性

18世紀の探検記の特徴として、科学的旅行記、帝国の書物、個人的見解と啓発の書物、そして読み物としての側面が挙げられるが、*Missionary Travels*にも類似する傾向が見られる。

#### 3章1節-1 科学的旅行記の側面の継承

リヴィングストンは、幼い頃から天文学や鉱物に関心を持っており、また薬学博士であり医療宣教師でもあった。科学者としてもその才能を発揮した彼は、医学や動物学、植物学、地理学、天文学、文化人類学などの側面からアフリカを観察、記録し続けた。例えばリヴィングストンは、1850年にゾンガを訪れた時、現地で目にする事が出来る鉱物や貝の様子を詳細に観察し記録している。

「この地域では、水の中に溶解している塩は、チュアンツァと呼ばれている平鍋で精製される。平鍋の中には一塊ずつの塩と1インチ半の厚みの石灰のみが入っているのが確認出来た。この地域の他のほとんどの鉱物は石灰と硝酸塩の一種が風化したもので、その多くが分厚く貝に覆われている。この貝は、ヌガミとゾンガの湖に棲息する軟体動物が持っている貝と同種のものだ。その貝には3種類あり、らせん形のもの、単殻のもの、二枚貝のものがある。」(Livingstone, D., 2001, vol. I, pp. 90-91)

科学的探検旅行によってアフリカの大量の情報を伝えたリヴィングストンは、その偉業が称えられ、王立地理学協会に彼に金の勲章を授与した (Jeal, p. 163)。

### 3章1節-2 帝国の書物としての側面の継承

リヴィングストンはアフリカに対する帝国意識を言明せず、また、クックのように自ら直接ブリテンの領土拡張に関わったわけではないが、彼は帝国の商業活動と深い関わりを持つ地域としてアフリカを描き出した。リヴィングストンは、ブリテンでは得ることの出来ない鉱物、良質な繊維の原料や果物など、多種多様なアフリカの自然産物を目にし、アフリカをブリテンの産業の原材料及び食物の供給地として捉えていた。

「その新しい地の可能性は、私たちの産業の原材料を生産することで、アフリカとブリテンの利益が今まで以上に密接に結びつくようになるだろうという期待を私に抱かせる。」

(Livingstone, D., 2001, vol. I, pp. 2-3)

リヴィングストンの言葉に魅了されたマンチェスターの商業界の人々は、彼を招き講演会を開催した (Jeal, p. 191)。リヴィングストンはこの席で、主に奴隷の労働によって綿花栽培が行われていたアメリカ南部ではなく、アフリカをブリテンの綿産業の要とすることを訴えた。貿易についてのリヴィングストンの言葉は、帝国の産業の発展に対する激励となり、ブリテンの人々が抱いていたアフリカへの関心を高めた。

*Missionary Travels* の献呈の辞は、王立地理学協会会長のマーチソンに捧げられている。マーチソンが会長を務めていた時期、地理学協会はアフリカへの主要な探検の大部分を支援していた。マーチソンは、科学的探検のみならず、帝国の商業的、地政学的利益を高めるために活動した人物でもあった (Driver, pp. 42-43)。彼は地図製作に対する政府の補助金や国王勅許を得ながら、帝国の

科学の機関としての地理学協会の活動を推進した。マーチソンは探検と予備調査を、ブリテンが世界規模で拡張するための必要条件と考えていた。彼は *Missionary Travels* の出版にも多大な助力を行った (Driver, p. 85)。リヴィングストンは第一次アフリカ探検から帰還後、マーチソンの計らいにより政府からアフリカ東海岸地方にあるキリマネのブリテン領事に任命され、新たな地域を探検するための資材と人材、資金の提供を受けた (Wallis, xxix)。政府と協会の後援を得て、彼は 1858 年に二度目のアフリカ探検旅行に出発した。

リヴィングストンと地理学協会の関わりは、帝国の実践家として活動したマーチソンとリヴィングストンが、深い繋がりを持つに至ったことをも示している。

### 3 章 1 節—3 個人的見解と啓発の書物としての側面の継承

先の、アフリカをブリテンの産業の原料や食料の供給地として見るリヴィングストンの言葉は、現地を探索した者の個人的見解の表れでもある。リヴィングストン自身のものの見方は、アフリカ人に対する感想や奴隷貿易の実態を伝える報告の中にも顕著に示されている。彼は *Missionary Travels* を出版した翌年、ケンブリッジの公開堂で講演を行った。この講演内容は、リヴィングストンが主著の内容を直接聴講者たちに分かりやすく語った記録として興味深い資料である。彼はこの講演の中で、アフリカ人女性は美しいとはいえ、現地住民が身体にほどこす習慣を見て不快を覚えたと述べている。

「ある部族の人々は上の前歯を全て叩き折っており、彼らが笑うと実に醜怪な印象を受ける。……また他の部族は鼻の軟骨に穴を

開け、小さなアシの茎を刺し通すことを習慣としている。それは鼻から張り出しており、見るに耐え難い容貌だ。」(Livingstone, D., 1858, p. 16)

このようにリヴィングストンには、現地住民の様子を、ブリテン人を尺度にして眺める時があった。一方で彼は、主に奴隷貿易の実態について生々しく伝えることを通じて、欧米人がアフリカ人に対して行っている非道な行為を非難している。ポーア人による現地住民急襲の現場を目の当たりにしたリヴィングストンは、事件の壮絶な様子を記録し報告した。

「植民地総督府によってポーア人の独立が発表されると、彼らは銃を装備してバクワイン族を襲い略奪を働いた。……ポーア人はバクワイン族の子供 200 人を奴隷として連れ去り、大人 60 人を殺戮した。」(Livingstone, D., 1858, pp. 34-35)

リヴィングストンはまた、一部のアフリカ人が自分たちの仲間の少年や捕虜と引き換えに、奴隷商人からヨーロッパ産の色鮮やかな綿の服や銃を手に入れている事実を知り、ヨーロッパ人によってもたらされたアフリカ社会への悪影響を嘆いている (Livingstone, D., 2001, vol. I, p. 106)。奴隷貿易の悲劇からアフリカ人を救わなければならないという彼の提言は、*Missionary Travels* に、ヨーロッパ人の進出から生じる問題を伝える啓発の書物としての性格を与えている。

### 3 章 1 節—4 読み物としての側面の継承

19 世紀の探検記の特徴としてコートが指摘するように、*Missionary Travels* でも、随所において臨場感溢れる語調で探検の様子が語られており、読者に驚きと面白さを感じさせる内容となっている。例えばリヴィングス

トンが1843年にモヴァツァ高地でライオンに襲われた時の様子について読んだ者は、アフリカ探検がいかに危険を伴うものであったか、考えずにはいられないだろう。

「私はまさに私に襲いかかろうとしているライオンと向き合った。……ライオンは私に飛びかかり私の肩に噛み付いた。ライオンと私は一緒になって坂を転げ落ちた。私の耳元で身の毛もよだつような唸り声を上げながら、ライオンは、まるでテリアが鼠にすることがごとく私に噛み付いていた。私は、猫に最初の一撃を食らわされた鼠が気絶するように、ショックのために失神してしまった。」  
(Livingstone, D., 2001, vol. I, p. 17)

第1章の3頁目で語られているこのスリリングな体験談により、読者はリヴィングストンの探検の世界へ一気に引き込まれるに違いない。*Missionary Travels* では、およそ全章に渡り、読み物として興味深い話が途切れることなく語られている。リヴィングストンに代表されるヴィクトリア時代のブリテンの探検家たちは、冒険物語の主人公として、実体験から伝えられるスリルを読者に提供したのである (Korte, p. 90)。

### 3章2節 強調されたメッセージ

以上のように *Missionary Travels* にも、*Voyages* で示されているような18世紀の探検記の諸特徴が見られる。だがリヴィングストンの探検記には、コートが見逃している特徴がある。それはこの探検記には *Voyages* には見出せない姿勢と語り—現地住民に対する共感と、現地住民のために活動しなければならないという主張—が登場するということだ。とくにそれは奴隷貿易とアフリカの産物の貿易に関する記述の中に頻繁に登場する。

「中央アフリカの現地住民たちは交易を心から願っているが、現在彼らが行える取り引きは、貧しい人々がどうしようもないほどの恐怖を感じている、奴隷貿易だけなのだ。……自由主義経済における生産物を消費するための道を開通すること、そしてキリスト教と商業をアフリカ人に紹介することが最も熱望されている。」 (Livingstone, D., 1858, p. 21)

もちろんリヴィングストンが述べているような、現地住民に対する共感に基づく言葉や、現地が被っているヨーロッパ人による悪行の被害に対する非難は、18世紀の探検記の中にも見受けられる。例えば、18世紀末にインド東岸を旅したヤコブ・ハーフナーは、彼がインドで見聞したヨーロッパ人の暴虐に対する弾劾の書となることをも意図して探検記を執筆した(ハーフナー、485頁)。ハーフナーは、インドでの自伝ともいえる彼の探検記の中で、植民地で繰り広げられている、とくにブリテン人の悪行を痛烈に批判している。

現地住民への共感に基づく探検家の語りは、コートが挙げる探検記の主要な特徴ではないが、リヴィングストンの探検記ではハーフナーのような記述スタイルは底流となり、読者へ強いメッセージを発する言説となっている。現地住民への共感と責任感という、アフリカ人社会に対する援助とも介入とも理解することが出来るリヴィングストンの姿勢の根拠は、彼が具体的にどのような目的を持ってアフリカの地で活動をしたのか知ることにより明らかとなる。

アフリカへ渡り、残酷な奴隷貿易の実態を目にし続けたリヴィングストンは、この非人道的な問題と生涯をかけて闘うことを決意した。アフリカ人までもが奴隷貿易に加担していることを知った彼は、キリスト教を教え広

めることにより、アフリカ人に奴隷貿易がいかに酷悪なものであるか教えようとしたのである。また、アフリカ人が経済的に自立出来るようになるために、豊かな農産物や天然資源を輸出することによってなされる、ブリテンとの自由貿易を提唱した。実際、リヴィングストンは最期までアフリカの内陸と海岸を結ぶ大河を求めて探検調査し続けたが、それは水運によるアフリカと諸外国との貿易の導入に積極的に関わろうとしたからであった。

19 世紀のアフリカ探検についてコートが参照しているメアリー・ルーズ・プラットの研究によれば、19 世紀の探検記では、現地人の慣習などをあくまで客観的に記述するスタイルがとられており、著者は現地住民との文化的、精神的な交流について述べることを避け、現地住民は他者として扱われていると考えられている。またプラットは、19 世紀の探検記では、現地住民と地理や地勢に関する記述が切り離されており、住民は描写から排除されていると述べている (Pratt, 1985, p. 121)。しかし *Missionary Travels* では、現地住民と著者の隔たりは感じられないばかりでなく、現地住民と積極的に関わり合おうとする探検家の姿を見ることが出来る。リヴィングストンの探検記を読む限りにおいて、19 世紀の探検家が現地住民との交流を拒絶したということは出来ない。パトリック・ブラントリンガーは、リヴィングストンは「アフリカ人を子供として、また野蛮人として見ていた」 (Blantlinger, p. 178) と述べているが、リヴィングストンは、アフリカ人を同朋として見つめていたのである (Livingstone, D., Livingstone, C., p. 5)。

だがこのようなアフリカ人に対する、リヴィングストンの共感と責任感に基づく言葉

は、世界へ文明とキリスト教を教え広めようとする、文明化の使命を感じていたブリテン人の見方の表れともとれる。*Missionary Travels* の中で繰り返し述べられているアフリカに対する博愛主義的な見解は、ブリテンの読者にとっては耳あたりのよい言葉であっただろう。そのため *Missionary Travels* は、アフリカを救うためにブリテンはアフリカへ向かうのだと考える人々に道徳的根拠を提供することによって、帝国のアフリカ進出を促してしまったと考えられている。

#### 4 章 おわりに

リヴィングストン研究の一環として、そして、二世紀の渡る探検記の内容を探検家の眼差しによって検証するための事例研究として試みられた本論を通じ、以下のことが提言されよう。

クックとリヴィングストンの語りを比較すると、18 世紀のブリテンの探検記の特徴が 19 世紀の探検記へ受け継がれていることが明らかとなる。もちろんこの例によってのみ二世紀の探検家とその著作全般を判断することは出来ないが、それは少なくとも冒頭で触れた、啓蒙から帝国へという両世紀の探検記理解に対する一つの反例を提供している。

だがリヴィングストンの語りにはクックにない特徴もあり、その源は、例えば 18 世紀やそれ以前の旅行記に遡ることも出来るのかも知れないが、彼の特徴は、前世紀の主要な探検記の特徴とは異なり、探検記の言説の大きな底流を形成していた。著作活動をするを、そして宣教師でありながら説教することさえも苦手としていたリヴィングストン一事実は、アフリカ人を一人も改宗させること

が出来なかった一が執筆した *Missionary Travels* が、ブリテンであれほどの人気を博したのは、そこに散りばめられたクックには見られない共感と責任感からなる言説が、読者の心を強く捉えたからだともいえる。

しかしそれは本人の意に反して、ブリテンの人々の帝国意識を助長し、帝国を拡張するきっかけともなった。リヴィングストンが思い描いた帝国は、力によるものではなく自由貿易を基盤としており、ブリテンとアフリカで行われる国産品の貿易は、双方の国に利益と幸福をもたらすと考えられた。だが善意に基づくこの構想は、彼の探検と探検記を通じて、ブリテン人の文明化の使命感を鼓舞し、結果的に帝国の暴力的なアフリカ進出を促した。*Missionary Travels* は、言葉のもたらす影響と結果を楽観的に解釈した著者によって執筆された探検記であり、読者によって内容が咀嚼されることを通じて、著者自身が意図していなかった帝国意識を助長する書物としての性格が付加されたという意味で、後天的な植民地言説となった。

*Missionary Travels* を分析することにより、18世紀と19世紀の探検記の歴史を、二つの世紀の断絶、啓蒙から帝国へという単純な図式では語る事が出来ないことがわかる。二世紀の探検記の内容と探検家が担った役割は、断絶面よりもむしろ継承面から捉えられるべきであり、それらにおける相違点は、断絶ではなく変容として理解されるべきだろう。なお、この変容の原因と影響は、探検家自身の思想とそれに作用した外的要因の双方から考察されなければならないものであり、リヴィングストン研究においてもこれから探求されるべき重要なテーマといえる。

そして、*Missionary Travels* の語りから、

従来なされてきたリヴィングストンに対する評価が再考されるべきだといえるだろう。リヴィングストンが及ぼした社会思想史的影響を考察する際には、リヴィングストン研究者たちの評価にさえ見受けられる、19世紀における帝国主義の尖兵、アフリカ分割の扇動者というレッテルを彼に貼るのみならず、彼が18世紀にまで遡ることが出来るほどの伝統的な思想と活動方針を体現した人物であったということも忘れられてはならない。さらには、彼が自らの意志を、善意と、驚くほどの無自覚さによって貫いたということをも合わせて理解されなければならないだろう。

## 参考文献

- 阪上孝(2000)「啓蒙と旅行記」京都大学人文科学研究所『人文学報』83号。
- ジェームズ・クック(増田義郎訳)(1992, 1994)『太平洋探検』上巻, 下巻 岩波書店 17・18世紀大旅行記叢書3, 4。
- ドーンズ・ブライミ=シャビュイ(中川久定解題, 広田昌義訳)(1982)「18世紀後半の世界周航記—ブーガンヴィル, クック, ラ・ペルーズ—」岩波書店『思想』702号。
- バトリック・ジェームズ・マーシャル, グリンダー・ウィリアムズ(大久保桂子訳)(1989)『野蛮の博物誌—18世紀イギリスが見た世界』平凡社。
- 林学(1986)「ブーガンヴィル航海記」とディドロ—啓蒙の世紀における旅行文学の一側面」徳島文理大学研究紀要編集委員会『徳島文理大学研究紀要』32号。
- フェリペ・フェルナンデス=アルメスト編(増田義郎監修, 植松みどり, 武井摩利, 竹内和世, 向井元子訳)(1995)『世界探検歴史地図』原書房。
- 三島憲一(2001)「ふたつの旅行記をめぐって—啓蒙と調査の両義性をどう考えるか(〔社会思想学会〕第二五回大会記録—自由論題)」社会思想史

- 学会 北樹出版『社会思想史研究』25号。
- ヤコブ・ハーフナー (栗原福也訳) (2002) 『インド東岸の冒険と旅行』岩波書店 17・18世紀大旅行記叢書第II期3。
- ルイ・アントワーヌ・ド・ブーガンヴィル (山本淳一訳) (1990) 『世界周航記』岩波書店 17・18世紀大旅行記叢書2。
- Bacon, F. (ed. Kiernan, M.), (2000) *The Advancement of Learning*, The Oxford Francis Bacon・IV, Clarendon Press.
- Brantlinger, P., (1985) 'Victorians and Africans: The Genealogy of the Myth of the Dark Continent', *Critical Inquiry*, XII, University of Chicago Press.
- Clark, S., (1999) *Travel Writing and Empire: Postcolonial Theory in Transit*, Zed Books.
- Cook, J. (ed. Beaglehole, J. C.), (1955-1974) *The Journals of Captain James Cook on His Voyages of Discovery*, Cambridge University Press, 4vols.
- Daunton, M., Halpern, R., (1999) *Empire and Others: British Encounters with Indigenous Peoples, 1600-1850*, UCL Press.
- Driver, F., (2001) *Geography Militant: Culture of Exploration and Empire*, Blackwell.
- Fletcher, I. M., (1963) 'The Fundamental Principle of the London Missionary Society', *Transactions of the Congregational Historical Society*, Congregational Historical Society, vol. 19.
- Forster, G., (1968) *A Voyage Round the World*, Georg Fosters Werke, Akademie-Verlag (first published 1777).
- Hiney, T., (2000) *On The Missionary Trail*, Chatto & Windus.
- Jeal, T., (1993) *Livingstone*, Pimlico.
- Korte, B., (2000) *English Travel Writing from Pilgrimages to Postcolonial Explorations*, Macmillan Press, St. Martin's Press.
- Leask, N., (2002) *Curiosity and the Aesthetics of Travel Writing, 1770-1840: 'From an Antique land'*, Oxford University Press.
- Livingstone, D., (2001) *Missionary Travels and Researches in South Africa*, The Narrative Press, 2vols (first published John Murray, 1857).
- Livingstone, D., (ed. Monk, W.), (1858) *Dr Livingstone's Cambridge Lectures*, Deighton, Bell and Co, Ball and Daldy.
- Livingstone, D., Livingstone, C., (2001) *A Popular Account of Dr. Livingstone's Expedition to the Zambesi*, The Narrative Press. (first published John Murray, 1865).
- Livingstone, D. N., Withers, C. W. J., (1999) *Geography and Enlightenment*, University of Chicago Press.
- Mackay, M., (1985) *In the Wake of Cook: Exploration, Science and Empire 1780-1801*, Croom Helm.
- Marshall, P. J., Williams, G., (1982) *The Great Map of Mankind: British Perceptions of the World in the Age of Enlightenment*, Harvard University Press.
- Martin, R. H., (1980) 'The place of the London Missionary Society in the Ecumenical Movement', *Journal of Ecclesiastical History*, Faber and Faber, vol. 31.
- Obeyesekere, G., (1997) *The Apotheosis of Captain Cook: European Mythmaking in the Pacific*, Princeton University Press.
- Pratt, M. L., (1992) *Imperial eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge.
- (1985) 'Scratches on the Face of the Country; or, What Mr. Barrow Saw in the Land of Bushmen', *Critical Inquiry*, University of Chicago Press, pp. 119-43.
- Spurr, D., (1993) *The Rhetoric of Empire: Colonial Discourse in Journalism, Travel Writing, and Imperial Administration*, Duke University Press.
- Wallis, J. P. R., (1956) *The Zambesi Expedition of David Livingstone 1858-1863*, Chatto and

探検する眼差しの持続と変容

Windus.

Youngs, T., (1994) *Travellers in Africa : British  
Travelogues, 1850-1900*, Manchester Uni-

versity Press.

(名古屋大学大学院経済学研究科博士後期課程)